

Ⅲ 3. 7) アウトリーチ

(3) 学生（中・高・大学生）の子育て家庭派遣プログラム

趣旨・目的

次世代の子育てを担う若者が実際の子育て家庭の中に入り、子どもにかかわったり、子育ての実際を体験的に理解することにより、子育てへの理解と関心を高める。また、親子にとっても多様な世代の人とかかわる経験をする場となる。受け入れ家庭はこの趣旨を理解し、学生が子育ての実際を体験的に理解できるよう努めると共に、多様な支えやかかわりの中で子育てを行うことの大切さを体験することを目的としてこのプログラムを行う。子育てひろばがコーディネートを行い、担当スタッフは学生、受け入れ家庭双方が満足できるような交流が図れるよう調整を行う。

実施方法

①対象

子育てひろばにおいて、5日以上のボランティア体験をしている中学生以上の学生。受け入れ家庭は、子育てひろばの利用者で、プログラムの趣旨に賛同する3歳未満の子どもがいる家庭。（できれば、学生が子どもに十分にかかわれる体験とするためには、子どもが2人以上いる家庭が望ましい。）

②期間・日時

3日以上、1日3時間～5時間を目安とする。基本的には、1家庭に学生2人がペアを組んで行う。夏休みや冬休みなど、学生の長期休暇の時期に定期的に行うことが望ましい。具体的な日時等は、子育てひろばスタッフが中に入り、学生と受け入れ家庭で話し合い、調整して行う。

③活動内容

学生は、決められた日時において、受

け入れ家庭に入り、子どもと一緒に遊んだり、子どもの世話をを行う。子どもとかかわることが中心となる。また、必要に応じて、食事の準備などの家事の手伝いを行う。

日常的なかかわりが中心ではあるが、学生自身が具体的にやってみたいこと、あるいは受け入れ家庭がぜひやってほしいと考えていることは、事前にしっかり打ち合わせを行い、互いが納得した計画立案を行うようにする。例えば、公園に行って遊ぶ、庭にビニールプールを出して遊ぶ、一緒に近くに買い物に行く等のプランが考えられる。

学生、受け入れ家庭共に一日ごとに記録を行う。

④必要経費

基本的にはボランティアと考える。ただし、学生および受け入れ家庭の交通費や食事代、その他最低限の必要経費については支払われるものとする。

⑤募集方法

子育てひろば内で受け入れ家庭の呼びかけを行う。学生に関しては、近隣の学校に募集を行う。ただし、日頃からひろばにボランティアに来ている学生がいる場合は、その学生に声をかけるのが望ましい。あまりたくさん募集をしまうと、十分な配慮ができなくなるため、注意する必要がある。

⑥コーディネート

コーディネートは子育てひろばが行う。基本的には学生数と家庭数を定め、募集を行う。希望者には、まずこの趣旨および具体的な内容等について説明を行う。

その後、学生および受け入れ家庭の希望や個性に合わせて、学生のペア（2人組）および学生と受け入れ家庭の組み合わせを行う。これらの組み合わせがうまくいくよう間をつなぐことが必要である。

研修を企画し、そこでは学生および受け入れ家庭がその内容をしっかり踏まえ

ると同時に、派遣当日が楽しみになるよう配慮する。学生と受け入れ家庭の打ち合わせの時には、簡単なお楽しみ企画を入れることも互いの緊張感がとれ、コミュニケーションを図る上で有効である。

学生のニーズや個性、性別、受け入れ家庭の子どもの人数や年齢、兄弟構成、父親のかかわりの多い少ない等を十分に把握した上でのマッチングが必要となる。このマッチングがプログラムの成否を握る部分もあるので、互いの情報収集および、それをもとにどのような組み合わせを行ったらいいかを十分に検討する必要がある。

⑦研修

学生がこのプログラムに参加するためには、以下の研修プログラムを行うことが条件となる。

○乳幼児の理解 (60分)

乳幼児期の発達、理解の仕方等について、具体的な子どものエピソードを通して学習する。

○乳幼児へのかかわり (60分)

乳幼児にどのようにかかわったらよいかについて、実際の遊び、困った行為への対応の仕方、お世話の仕方、安全への配慮等について、具体的なエピソードを通して学習する。

○ケーススタディ (60分)

以上の2回の研修を踏まえ、実際に自分が子育てひろばのボランティアを行い、その具体的なケースから自分が気付いたこと、困ったことを発表し、どのようにかかわったらよいかをみんなで考える。

○受け入れ家庭との打ち合わせ会第1回 (60分)

受け入れ家庭との対面を行い、学生、受け入れ家庭の自己紹介および、お互いの今回のプログラムへの思いと実施日時等について意見交換を行う。

○受け入れ家庭との打ち合わせ会第2回 (60分)

第1回の意見交換を踏まえ、具体的な計画を作成する。

○事後研修 (60分)

すべての家庭でのプログラム終了後に、集合し、受け入れ家庭、学生がそれぞれ分かれて感想を出し合い、今後どのような課題があるかについて話し合う。

○受け入れ家庭の事前プログラム

まずは、各家庭の家族構成や、受け入れ可能時期、このプログラムへの思いや要望等について記述してもらう。その上で、受け入れ家庭に集まってもらい、プログラムの趣旨の理解、学生の受け入れ方について、学生との過ごし方に関する諸注意、受け入れに関する各家庭の要望や質疑応答について行う必要がある。この受け入れ家庭の事前プログラムを行うことが、趣旨の理解が徹底されると同時に、学生とのマッチングを考えるための情報収集が行える。

留意事項

トラブルや事故に関しては、このプログラムを行う子育てひろばが責任をもつことになる。そのため、事故やトラブルが起こらないような基本的なルールの説明や研修、相互の調整等を十分に行わなければならない。場合によって、学生や受け入れ家庭にふさわしくない点がある場合は、このプログラムを中止する判断も求められる。また、保険に関しても、ふさわしい範囲を十分に検討して入る必要がある。

ただし、最も大切なことは、この目的である、学生自身が子育てへの積極的な理解が得られ、受け入れ家庭も学生のような多様な世代が子育てにかかわることの意義を感じられることである。このような体験をするためのコーディネートができるよう、ひろば担当スタッフの工夫が必要となる。また、このプログラムを行うためのスタッフの事前研修も必要となる。

Ⅲ 3. 5)

(4)出張親子あそび場プログラム(出張ひろば)

趣旨

現在、様々な子育て支援の施設が作られてきているが、それが地域の末端まで行き渡っているとは考えられない。また都市部における子育てひろばの利用者は、歩いて通える距離に住む方が多くなっている。そこに施設を急激に増やしていくことは不可能なので、回数は少なくとも、小さなひろばの開催が求められている。今回の提言においては当事者性の高い育児サークルではなく、すでに日常的なひろばがある場合や団体がある場合を想定し、そこを基盤にした出張型のひろばを提言したい。

目的

出張親子あそび場を実施することにより、ひろばが近くにない親子にもひろば機能を提供したり、ひろばを知らない親子への広報を行う。

実施方法

①対象

0歳から2歳、3歳位の親子。

②日時・回数

月に2回から週に1回程度の割合で実施する。午前のみ、もしくは午後のみ実施する。

③場所

公民館や文化センター等または地域の自治会館や集合住宅の集会室等を利用。または、自治体が主催する赤ちゃん会などの場への遊び提供の出張もある。

④実施形態

継続的に行う出張ひろばの場合、基本的にはプログラム重視ではなく、自由に

気軽に過ごせる親子ひろばの形態で行う。また、自治体が主催する親子の場に遊びを提供するような限られた時間や場での出張プログラムの場合、手遊びやパネルシアターなどの具体的な活動を中心に行うことを通して、常設のひろばへとつなげていく。

⑤実施主体

複数の団体や、行政が連携し人材や知恵を出し合う。現地周辺でのボランティアを募り、地域の中でのつながりを作る役割も果たす。

⑥料金

ひろばの開催に関しては原則無料であることが望ましいが、これについては意見の分かれるところでもある。誰でもが参加しやすいという反面、多少の受益者負担があった方がよいのではないかといった意見もある。その辺は地域性も加味して、実情にあわせて実施していただくことが現実的である。実際には200円から300円程度、会場費や保険料として徴収しているところもある。

⑦人材の確保と育成

人材や場所の確保は同時にすすめていかななくてはならないが、なによりまずは人材であろう。施設や団体の本拠地での募集もあるが、地域との連携を考えたいので、出張先の地域で募集をしてみることも有効である。地域の中で誘い合うといったことも必要だが、もともとつながりの薄い地域であればそれも望めない。逆にひろばで出会うことにより、地域でのつながりが深まるケースが多い。

人材が確保され活動が継続していくと必ず研修・育成の課題にぶつかる。それは、出張型で人材を募集した場合、活動を続けていく中での日常的な話し合いや、コミュニケーションの不足という問題や研修のノウハウ不足といった多いように見受けられる。実際に借りあげた場所であれば、時間になれば外に出なくてはな

らず、会議の部屋もあるわけではない。そうした中では、活動の前後に小さい部屋を借りたり、別に集まる機会を設けたり、本拠地に集まったりすることも工夫できる。少しの時間の中でも振り返りや、討議の場面を増やしていくことが必要である。

⑧場所の確保

各機関との連携にも大きくかかわるが、貸施設の長などとの話し合いは欠かせない。特定の団体ということではなく地域の振興に貢献するという意味合いを十分に理解してもらうことが大切である。また商店街や企業の貢献なども模索していく必要がある。

⑨各機関との連携

運営は、共催のような形で複数の団体が関わることを望ましい。共催は無理としても、後援や協力は様々にとりつけていくことが必要である。地域の中には様々な資源があり、まずそれを知ることが大切であるが、行政の中にも、担当している管轄が福祉系、教育系、福祉系の中でも保育所や保健所といった子育てに関わる部所は多岐にわたっている。

また社会福祉協議会・ボランティアセンターなど、地域活動の歴史のある部所もあるはずで、そうした部所のノウハウも活用していきたい資源である。

また地域の自治会や民生児童委員との連携も欠かせない。町内会や団地の自治会といったものも地域貢献のための団体であり、人材も豊富である。当然子育ての支援に適した人材であるのかといったことは疑問も多いと思われるが、多様な価値観の中、研修や話あいを通して、相互に歩み寄り、学びあっていく過程も大切である。

⑩利用者の主体的参加への移行

育児サークルでなく、主催者のいるひろばではおのずと受身の姿勢になり、様々なプログラムへの要求がでてくることが予想される。もちろん参加している

のは親子だけではないので、スタッフやボランティアの力を発揮するという方向もある。そうした中で徐々に利用している親子にも主体的な参加を促していくことが必要である。まずはあせらず、はじめはきちんと受け入れる姿勢も大切で、スタッフ、ボランティアの研修においてはそうした視点も重要となってくる。

⑩ 常設のひろばにつなげる

自治体が主催する赤ちゃん会等への遊び提供の出張ひろばなどを行うこと目的は、既存の常設のひろば活動の広報的な意味合いが強い。限られた時間の中で遊びを提供することにより、親子が楽しさを感じることが大切である。また、子育て上の悩みなどを聞くなども大切である。この出張ひろば活動を通して、常設のひろばの存在意義を知ってもらい、できればそちらに足を向けてほしいことを伝えることが大切である。

留意点

・出張ひろばであっても、単発的な場の提供ではなく、継続的に行うことが大切である。自治体が主催する場への参加といった単発的な場ではあっても、そこから既存の常設のひろばへとつなげ、継続化していくことが大切である。

・出張の場であっても、基本的には通常のひろばの考え方と変わるものではなく、あくまでも親子が地域の中で交わり、支え合い、学び合う場に結びつくものであることが大切である。

Ⅲ 3. 8) ひろばの相談

ひろばに於ける相談は、子育て支援センターのように一つの機能として明確化されているところと、まったく設定されていないところと様々な現状である。今回の研究調査から、現状の実践を踏まえ次の提言をしたい。

相談の形態

ひろば相談は、今回調査の数字に見られるように、「日常的な集いの場」における相談が最も多かった。次に「電話相談」「面接相談」そして「専門家による相談」「グループ相談」という結果に示されたように、それぞれのひろばが持つ機能によっても異なっている。その「日常的な集いの場」から出る相談は、一般的にはそこに居るスタッフや仲間によって支えられている様子が見えがえる。しかしながら内容の重大性・緊急性・またプライバシーの問題などから必要に応じて個人面談やグループ相談へ導かれていくことが望ましい。「電話相談」もまた同じように、内容によって次への相談ステージを用意することも大切なひろば相談の機能である。

相談窓口

ひろばが毎日開設か否か、相談日を備えているか否か等の状況によっても異なるが、「電話相談」は何れのひろばでも用いられている相談方法である。電話相談は匿名性、随時性、即時性などの手近な相談として窓口の役割りを担っていることが多く、その相談内容から次へのつなぎの場として大切なのが、ひろば相談の意義と考えられる。

相談内容の分類

0 から 3 歳くらいまでの親子が集まる「ひろば」であるから、相談の内容は当然のことながら子どもの生活年齢に伴う日常生活上での行動や関連のものが多い。「日常的な集いの場」で何らかの解決ができたとしても、親たち自身の話し合いによる学習的解決をする「グループ相談」

方式も、昨今の利用者には人気が高い。その他、家族関係に問題を持つ利用者や医学的分野からの援助が必要な場合もあり、相談内容によっては適切な専門相談員や機関に振り分けていくことは、ひろばスタッフの大切な役割りである。しかしながらこうした作業はかなりの力量をもつスタッフの育成が必要となる。

スタッフの研鑽

今回の調査では、ひろばにおける支援者としてのスタッフには専任者が多いとの結果であった。そのひろばでの相談を行なう上での課題として、相談を受け入れる側のスキルの向上、カウンセリングの基礎研修の必要性、全職員のカウンセリング自己研鑽の必要性、相手の気持を受け止める聴き方、などのカウンセリング・マインドの必要性を感じ自己研鑽を希望している。これはたいへん重要な気付きである。現場での相談の中身はさまざまであり、深刻な自身の悩みを時には専門職よりも身近な関係にあるスタッフや担当者に依存する親がいない分けではない。公設・民設 NPO に関係なく携わるものへ全てに対し、必用な研鑽の場が整うこと、またスーパーバイザーの存在が確率することが望まれる。ひろばを利用する人にとっても安心な場ともなるであろう。

支援者サポートプログラム

相談は 1 対 1 を通常の面接としているが、仲間関係の育成と育児上の問題を参加者相互関係の中で解決したり、自からの気づきの中で学習的な理解を深めて行く方法としてグループ相談を提唱したい。例えばカナダ ノーバディズ・パーフェクト・プログラムが用いている方法で 8~10 人程度の親グループの編成によって進める。ファシリテーションを取り入れて行なう手法は、参加者(親)一人ひとりが持つ価値観を相互に伝え合いながら問題を解決していく方法である。昨今ひろばには適した学習形式と考えている。

これはスタッフがその任(ファシリテーターと呼ぶ)を学習することが求められるが、この学習内容はまさにカウンセリング・マインド理解につながる。

1) 虐待予防のためのプログラムのについて

親による幼児虐待という痛ましいニュースが増えてきている。虐待というのは決して他人ごとではなく身近にも起こりうることであるという認識を、子育て支援に関するものとして、日頃からもつて臨んでいることが望まれる。

こころの問題というのは、専門機関にあがってくるまでに時間がかかる。虐待の場合、無自覚的にはじまって次第にエスカレートしていくことが多い。親が自分からサポートを求めることが少ないため対処が遅れて最悪の事態にもなる。子育てに自信のない親が増えていくなかで、潜在的に問題を抱えている家族を視野に入れた予防的な対応を考える必要がある。

趣旨

ひろばは、専門の相談機関ではないので、病院や相談室のようなあらたまった雰囲気がない。スタッフやサポーターが相談員を兼任して、相談員のいる場所がスペースで、相談ができるライフ・スペース・インタビュー(生活場面面接)が主なやり方である。専門機関だと少し抵抗のあつて相談にいけない親でも気軽に話しができるため、問題の深刻化を防ぐことができる。

したがってひろば相談は基本的に予防的な役割を担っている。予防(日常生活)→早期発見→問題対応という見通しをもってひろば機能として位置づけたい。

実施方法

日常的に心がける活動例を挙げる

① 日常の援助的かかわり：

・一人ひとりの『常態』を支援者が共有できているか。

② カンファレンス(事例検討会)：

・臨床心理士等にスーパーバイザーとして同席してもらう。

③ グループ・ワーク：

・予防的プログラム(前出のノーバディズ・パーフェクト・プログラム)
・問題対応的プログラム(レインボウ・プログラム)：心の痛みを回復し自己肯定感を高める。被虐待幼児から虐待の加害者である親まで、種々のレベルがある組織化されたプログラム。筆者らが実践・研究中であるが、虐待の連鎖を立つという意味で予防的観点から優れている。

④ 虐待予防に関する学習会・研修会

⑤ 講演会・公開講座等

⑥ 情報提供

・リソースを充分にもっていること

⑦ 他の機関・団体との連携

・情報や活動の共有、交換。

⑧ 巡回相談(臨床心理士等による)：

・気なる事例について相談。ふだんの様子を記録しておくこととアセスメントに役に立つ。

⑨ アウトリーチ(別項参照)

2) おわりに

親たちがもっともよく利用する子育て支援はひろば、子育て相談は数%である。そして相談相手に選ぶのはパートナーや親に次いで子育て仲間で約60%、相談者・機関は数%以下であった。孤立化しがちな子育て期の親たちにとって、「ひろば」は、子連れで集い、仲間同士と気がねなく話し合える居場所になっているのであろう。親たちにとって日常の延長線上の場であつて、特別に相談に来るところという認識は少ないようである。子育て期にだれでもが抱えるちょっとした悩みを話し合える『場』として予防的な機能を果たしていると推察される。ひろば相談を支えている支援者の役割は極めて大きい。

文献：「シングルシンフォニー」子ども家庭リソースセンター訳・編 小学館スクウェア 2003

Ⅲ 3. 9) 情報提供

親のニーズ調査によると、地域のさまざまな子育て支援のなかで、親が現在もっとも利用しているものも、今後利用したいとおもっているものも親子の集うひろばで、もっともほしい情報は、ひろばに関するものであった。そして、ひろば利用者は、一般の子育て家庭の親に比べ、ひろばだけでなく、子育て相談、子育て関連講座、子育てサークル、母子の健康や医療に関する相談なども有意に多く利用していることがわかった。また両者の子育てに関する相談相手を比べると、ひろば利用者は子育て仲間の他、保健センターの専門職、心理職等、専門職も有意に多くあげている。一方一般の子育て家庭の親は、自分の親、保育所の保育士を有意に多くあげていることもわかった。

ひろば利用者は、利用することで仲間をえ、情報交換し、ひろばを拠点に同心円的に他の社会資源へと広がっていくのに対して、利用していない親は、仲間から情報を得る機会がすくない分、孤立した状況になりやすいと考えられる。

情報不足と孤立感、育児負担感が重なると、子育てが困難になりやすい。前項で、虐待予防プログラムを提案したが、まずは、ひろば情報を届けること、アウトリーチが大切であることが明らかになった。

(1) 子育て情報ライブラリー

子育てに必要な情報が、支援を必要とする子ども家庭にとどくための仕組みづくりである。カナダでは親が訪れたドロップインでおよそ子育てに関する情報ならたいいものが入手できるように、情報が一本化されている。親は多くの正確な情報を提供され、その中から必要な情報を自分で選択して決めることができるのである。日本の場合、地域には親が利用できる子育て関連の社会資源が数多くあるので、カナダ方式をとりいれると、もっと小さな子連れで遠くまで足を運びにくい親が利用しやすくなる。

趣旨

正しい情報提供のあり方を工夫して親をエンパワーする。

実施方法

活動の進め方を例示する。

①他の機関・団体との連携

- ・情報の一本化は最も重要である。国、地方自治体、民間をとわず、教育・福祉・医療・・・等々、およそ子ども家庭支援に関連するすべての社会資源と繋げる。連携のかなめは、繋ぎ役としてのNPOやボランティア。
- ・事例を通して関係を広げたり、講座等で繋がる。信頼の上で情報を共有する。

②情報（データ）をストックする。

- ・子育てに必要な情報を幅広く集めて、少しずつ積み上げストックしていく。
- ・活動を通して得た情報も成果とともにストックする。例えば、次ページの『転入・新米ママのための子育て事情講座』の場合、企画・実践・検討・その他すべての成果物を情報（データ）としてストックする。

③フィルタリングする。

- ・複雑多様化する情報のなかから、どんな情報（判断材料）を正しく親に提供するか。これまで以上に責任が重い。
- ・本当に必要とする情報（判断材料）を親が選択できるように、支援者は専門的な知識が必要になってくる。

④情報の分類

- ・情報が多様になるほど、利用者は全体像が見えにくくなる。
- ・情報（判断材料）をわかりやすく提示。
- ・情報コーナー
- ・図書カードのようにファイリング
- ・その他

⑤考える情報（判断材料）を提供する。

- ・情報を提供し、選択し決めるのは親である。
- ・どれを選択するか。今まで以上に考えなければならない

⑩広報活動・出版活動

活動例として、児童館が発信基地となる支援プログラムを参照（Ⅲ3.10）。

(2) 転入・新米ママのための子育て事情講座（親同士の情報交換会）

目的

転入者や、第1子を出産したばかりで子育て情報や仲間を必要としている者が、地域に密着した子育て情報を得たり、子育ての仲間をつくるためのプログラムである。

子育て支援制度が充実しても、親が必要な支援を必要な時に利用できなくては有効には機能しない。そのような子育て情報を発信者から受け手へという構図ではなく、お互いが交換しあうことにより得ることを目的としている。また、情報交換することにより、地域の身近な子育て仲間を作ることに繋がるものである。

実施方法

① 対象

他市・他地区からの転入者、子育て情報や子育て仲間を必要としている者。

② 開催日時

平日の午前中に開催。年に2～3回実施する。

③ 内容

講座の参加者皆が参加者であると同時に講師でもある。お互いが持っている子育て情報交換の会である。

育てている子どもの年齢によって、欲しい情報が少しずつ違うため、子どもの年齢と地区により小グループを作る。

各グループに1人は現役の先輩ママが入り、コーディネーター役となり、「子どもがよく集まっている公園は・・・」「小児科や子どもをよく診察してくれる歯科は・・・」といった、実際子育てをしている人たちが必要としている生の情報をお互いが出し合う。

話が円滑に進むよう、参加者同士が少しでも打ち解けやすいように、お菓子やお

茶を楽しみながら、ひざとひざを突き合わせて子育て情報を交換する。参加者同士がお互いに連絡先を交換しあえるよ

う、連絡先が記入できるカードなどの用意もあるとよい。

また、行政の子育て支援やサークル情報も同時に得られるよう、出張コーナーやサークル紹介コーナーなどを時間内に設定してもよい。

行政との連携によって実施される出張コーナーでは、子育て支援事業の説明や、行政による子育て相談や発達相談がその場で受けられるなど、アウトリーチ的な実践も行うことができる。

またサークル紹介コーナーでは、サークルの代表者らが、それぞれのサークルの活動紹介を行なうことにより、転入者や新しく親になった者が自分に合うサークルを選択したり、入会のきっかけとなるものである。

④ 必要経費

参加費はお菓子とお茶代として100円～300円。子どもによっては、親が落ち着いて話をすることができない場合もあるので、希望者には保育を用意する。

⑤ 募集方法

転入者や新しく親になった者は、子育て情報の入手が困難であることから、地方新聞や広報を通しての周知が有効である。ホームページなどインターネット上での募集も大切である。

⑥ ふり返り

⑦ フォローアップ

留意点

コーディネーターは、スタッフが行う。育児サークルのメンバーによるサークル紹介や各相談機関の出張相談を取り混ぜながらも、親同士の出会いのきっかけとなるような配慮をしていく。

情報が偏ったり、一部の参加者だけが話し続けたりしないよう、小グループのコーディネーターが必要である。

Ⅲ 3.

10) 児童館での支援プログラム

趣旨

児童館は、これまでも乳幼児とその親に対する支援事業を実施してきた。厚生労働省の「平成 13 年地域児童福祉事業等調査」によれば、その数は 4,577 館中、66.4% の 3,038 館と半数以上の児童館が実施していることがわかる。また、児童館利用児童の状況では、乳幼児から高校生までを 100% とした場合の乳幼児の利用率は 24.4% と、小学生の 67.6% に次ぐ高さとなっている。

このデータからも乳幼君子育て支援が児童館における主要な活動に位置づけられていることがうかがえる。また、平成 14 年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書「児童館における子育て・子育て環境についての調査研究」(主任研究者 伊志嶺美津子 関東学院大学教授) から実際にどのような活動が主に行われているのかを見ても、親子が気軽に集うことができる場の提供や、親子の仲間づくり支援等になっている。

一方で、同調査によれば、乳幼児のための部屋を持っている児童館は、「専用の部屋を持っている館」、「時間限定で使える部屋を持っている館」を合わせても、極めて少ない数値となる。したがって、乳幼児とその親の支援プログラム活動時間は、小学生以上の子どもたちが下校する前の午前中が中心なるのが、全国的な状況である。

親子が集うひろばに関する事業のニーズが全国的に広まり、全国各地でつどいの広場事業が広がりつつある。子育て家庭への調査からも明らかなように、利用者たる親のニーズは、親子がいつでも気軽に立ち寄り、仲間づくりや、ちょっとした相談ができる場所を求めている。国の「つどいの広場事業」においても、週五日以上の開設を求めている。

このような中、「時間限定で使える部屋」しかない児童館では、これまでどお

り午前中のみ活動としてしか実施できず、常に開設していて、ふらっと立寄ることができる場を求めている親のニーズとはズレが生じることは否めない。

しかしながら、児童館は長年にわたって地域に根ざした活動を積み上げ、多様な年代が自由につどい、活動を展開しているという強みがある。

そこで、ここではこれらの状況を鑑み、そのような状況で展開が可能と思われる子ども家庭支援プログラムについて述べてみたい。

(1) 地域の子育て支援ネットワークの核としての機能強化

目的

児童館の重要な機能として、様々な機関、団体、施設と連携し、ネットワークを形成しつつ活動するという、地域における児童健全育成活動の拠点施設としての役割を果たすことが挙げられる。

この機能を、子ども家庭支援の分野において、さらに強化し、地域の子育て支援ネットワークをつくるコーディネーターの役割を果たすよう求めたい。

児童館は全国の 7 割が公設公営であり、長年、児童健全育成活動に関する実績をあげ、地域からの信頼や期待を積み上げてきた。行政からの支援を受けたり、連携を取ったりしながら、真に住民の意向を汲んだ意味のある活動を行うことが容易な立場にある。今一度、この利点を活かし、地域に点在する子育て関係の機関、団体等を繋ぐ役目を果たしていくことを目的とする。

対象

子育て支援にたずさわる機関・団体・個人等。

実施方法

① 地域の子育ての現状を把握する

地域における子育ての現状の何が問題で、利用者たる親が、何を望んでいるか

を把握する。そこから、どのようなネットワークを構築するかを検討する必要がある。質問紙調査やヒアリング等を実施しニーズを的確につかむことである。

②地域資源の点検

上記の現状に対して、地域にはどのような資源（機関、施設、団体、人等）があるかを点検する。

③ネットワークのためのアプローチ

地域の子育ての現状を整理し、問題点が明らかになったら、上記資源とパートナーシップが組めるようにアプローチを行う。児童館として、これまで全く接触がない連携先の場合は、行政や利用者、すでに連携をしている団体等を介してコンタクトをとるとスムーズに行うことができる。他の施設等とコンタクトをとり、連携や協働の体制を作り上げるためには、児童館側の地域の子育て環境に関する知識と、熱意が必要である。また、児童館が主役となろうとはせず、繋ぐ役目に徹することも重要である。

④ネットワーク構築のための具体的な活動

児童館が中心となって、連絡会を開催して情報交換・ネットワークとしての活動計画や連絡体制を整えたり、子育て関係の機関・団体等が共通に持っている問題点をテーマにした学習会を開催したりする等、ネットワークそのものの具体的な動きを展開する。

⑤ネットワークの存在を地域住民に広報する

せっかく、ネットワークが構築され連携が図られるようになって、その存在を地域住民が具体的に知らされていないならば、「絵に描いた餅」になってしまう。地域全体で子育てに取り組むという体制の活性、促進を図る意味からも、積極的にネットワークについて広報し、住民の参画を促し、子育て家庭が地域に見守られ

ているという安心感を持たせるべきである。広報は広報誌等の媒体によるものばかりでなく、ネットワークが主体となって実施するイベントや、地域住民向けの講演会、学習会等の企画を通して可能であろう。児童館が長年培ってきた遊びのプログラムを有効に活用し、子どもを中心に行事を展開すれば、母親のみならず父親、中高年、思春期児童等様々な世代が参加しやすいものになるだろう。

(2)児童館による子育て家庭向け情報発信の強化

目的

前記のネットワークを活用し、地域の子育てに関わる様々な情報を一元的に提供できる体制を児童館内につくることを提案する。

子育て家庭支援を行い、子どもも大人も自由に、気軽に立寄ることができる公共の施設である児童館に、情報を集めて提供することで、「児童館に行けば、何か情報がある」との安心感を与え、子育て情報のセンターとして、地域の子育て環境の充実に一役買うことを目的とする。

対象

子育てに関わる親、祖父母、支援者、研究者等、幅広い層のニーズに応える。

実施方法および留意点

①情報提供の場としての雰囲気をつくる

情報を提供する以前に、情報を提供する側の児童館が、いつでも、気軽に立寄ることができる雰囲気をつくっていないければならない。多くの情報を持っていても、児童館の感じが悪く、入りにくい状況であったとしたら本末転倒である。

さらに、児童館内でのプライバシーに気を配る必要がある。各々入手している情報には、他の人に知られたくない情報や、隠しておきたいことがらもあると思われる。そうしたことから守られて、は

じめて安心して情報が入手できる。

②情報の内容

医療機関、子どもに関する制度、幼稚園・保育園の情報、その他の子育て支援サービス、子どもの心と身体の健康、など、子育てに関わるあらゆる情報を提供できることが望ましい。さらに、常に最新の情報に更新し、提供ができるように情報入手先との連携を強め、配慮する必要がある。

③提供の方法

情報提供専用のコーナーがあることが望ましいが、あらたな設置が困難であれば、ロビーや図書室の一画等で静かに情報検索ができる場が作れると良い。

施設や制度のパンフレットは欲しい情報がすぐに取り出せるようにファイリングして整え、必要があれば気軽にコピーが使える状態にする。

パソコンを利用して情報を取り出し、プリントできるようにしておくのも良い。

また、先のネットワークによる活動とつなぎ、個々の機関や団体の活動情報を掲載した情報誌を発行する等の方法も考えられる。その制作に、子育て中の親にも参画してもらい、企画や情報収集が行えると、真に子育て家庭が必要とする情報が網羅された内容となると同時に、人間関係の創出や、親の自己実現の場になると考えられる。

母親、父親、祖父母等に対して育児講座や、子育てに必要なとされる様々な講座を企画することも情報提供の一つである。

④職員体制

あらためて情報提供のための職員を配置する必要性はない。

しかし、利用者がどのような情報を欲しているかキャッチするアンテナを常に張りめぐらし、何気ない親との会話から、その親にとって適切な情報が与えられるよう情報の整理ができていなければならない。

また、基本的に情報提供は利用者が主体的に取り出すことを前提とし、職員は利用者が迷ったときのサポート役に徹する。あくまでも最終的に判断するのは利用者自身と考えることが必要である。そして、利用者が気軽に尋ねることができる雰囲気を持っていてはならない。

さらに、児童館から情報を提供する際に、同じ事柄に対して、職員が違っていると情報も違ってしまおうというようなことがないように、このことについて職員間で十分にコンセンサスが図られていることが重要である。

⑤相談への対処

児童館に来館する親の多くが、子育ての中でちょっとした悩みや疑問を持っていることがある。その多くは日常の活動の中での会話やアドバイスで解決するものである。しかし、そうした中で児童館活動での会話やアドバイス、情報提供だけでは、解決が困難な内容や、深刻な悩みの場合は、ネットワークを活用し、他機関・施設等の専門家を紹介して繋ぐ必要がある。この時、相手先の機関や施設の具体的な担当部署か担当者名を挙げられると、利用者は安心するものである。

また、相談を受けた職員は秘密保持を厳守しなければならない。

11) 特別なニーズへの対応

(1) 心のバリアフリー・プログラム

趣旨

様々な親子が自由に集う「子育てひろば」には、これまで一度も障がいを持った子どもたちと出会ったことのない親が来ている。その人たちにとって障がいを持った子どもがそこに居ることや、自分の側にきた時とつきにどうしたら良いのかわからないという戸惑いがある。特に外見だけでは分かり難い情緒障がいや広汎性発達障がいを持つ子どもの行動には、どう対応してよいのか、人々の受け入れ難い気持と戸惑いを隠せない表情に出会う。

ひろばのスタッフとしてはそこに集うすべての人たちがお互いに認め合い、気持ちよく過ごせる場になることを願い努力しているのだが、それは未だ普遍的な解決には至っていない。

ひろばに出入りする人々の様々な反応や事例を通し、「こころのバリアフリー」を実現するための取り組みを提案する。

目的 ーある事例からー

中学一年生のS子は赤ちゃんが大好き、学校がおわると「ひろば」にお姉さんボランティアとして参加している。言葉によるコミュにケーションが難しいS子は、大好きな赤ちゃんに積極的に近づき“好きすき”というように頬ずりをしたり抱きたがったりする。人見知りの赤ちゃんが泣いてもその意味を理解することは難しく、戸惑ったりもっと近づこうとする時もある。そんなS子に親たちもどう伝えたらよいのか分らず避けたりする姿もあった。しかし顔なじみの親たちが間に入って、彼女の気持を代弁してくれたり、赤ちゃんの気持を教えてくれる。初めはS子にどうかかわってよいか分らなかった親たち、スタッフでさえ今まで障がいを持つ子と共に過ごす経験が無かったこと、遠慮があったことなどに、S子を通して気付いてきた。一緒にいることが嬉し

いことも嫌だということも、諦めずにS子に伝えた結果、気持ちが通じ合うことを知った時に人は変われること、必要のない遠慮はせずに素直に正直に付き合うことが大切であることを学んだ。

ひろばで嬉しそうにボランティアをするS子の存在は「いろんな子がいるんだよ」「その子はその子でいいんだよ」という生きたメッセージである。人は一人ひとりみんな違うこと、その違う一人ひとりが大切に素晴らしい存在であることを、みんなに伝えることを目的とする。

1) 日常的なひろば体験

むくどりホームの事例から

札幌市南区に1996年8月に開園した、「藤野むくどり公園」というバリアフリー公園がある。公園づくりのために市はその前年から市民(町内会、子ども会、障がい児親子、障がい児教育者)行政、設計、コンサルタント関係を加え、合計57名から成るメンバーを構成、5回に亘るワークショップを重ねた。公園基本設計案にはたくさんの人たちの意見が汲み上げられた。その結果、かつてない障がい児者が遊べる公園ができて上がった。このワークショップによる人と時間の過しかたがその後の実践活動に大きなインパクトを与えた。

公園をソフト面でサポートする、個人の運営による「むくどりリホーム・ふれあいの家」*は、公園開設前から視覚障がい児のための絵本作り、町内会による公園管理のボランティアとの連携等まちづくりのための動きを始めている。

実施方法

①対象

ひろばに集まる親子、兄弟・姉妹

②広報活動・呼びかけ

パンフレット(写真・絵本、玩具など身近な環境整備とひろばの紹介)の配布

③開催のための準備として

いろいろなハンディキャップをもつ人

がいつでもひろばに来られるきっかけづくりとして「ふれあいの日」を設定する。

心のバリア・フリーをめざす心熱い人たちが活動を準備することからはじめたい。障がい児・者を理解しているかその教育に携わった協力者がいることは、この活動を展開していく大きな力となる。近隣の保育所や幼稚園と連携して、子ども同士の交流から始める。ひろばに来る親子への啓蒙も大切な導入。小さい時から始まる子ども同士の心のバリア・フリーは人の成長に大きな絆を生む。

④活動の進め方と留意点

i さまざまなボランティアを導入する

場が設定されると各種のボランティアの申し出がはじまる。公的なボランティアのみでなく個人のボランティアの申し出にも目を向けることが大切。

社会福祉協議会をはじめ遊びの紹介、子育て相談会、講習会の講師、以前に見学に来た子ども達が大きくなってボランティアとして活動してくれる。手芸、陶芸、手話、地域との連携は特別なニーズへの対応のみでなくひろばの成長に大きく貢献する。

ii ハンディを持つ子どもの親と対話し、子どもの遊び相手になる

障がいを持つ子どもの家庭には、とくに心のケアと親の自己実現の場や時が必要である。障がいをもつ子どもの扱い方が難しいこともあって、親が子どもから瞬時も離れることが難しい。特定の場以外になかなか外出できない親子にとって、同じ年齢の子どもが集う場に入れることは得がたい機会である。それだけにスタッフの親へのかかわり方は、親のところに安らぎを生み、子どもと親の心に寄り添うものでありたい。

iii スタッフには専門性が求められる

ハンディを持つ子どもとのかかわり方は、容易ではない。どのようなアプローチが良いのかが問われる。ハンディの特徴を良く学習したうえで、その子どもにあった遊具や援助また環境づくりを行う

ことが求められる。ノンプログラムとは、何も方策を持たなくてもよいということではなく、質的な力量が求められることを理解しなければならない。

活動例

①「障がい」の話聞く会 一親同士のつながりの場として一

札幌「むくどり公園」をソフト面でサポートする「むくどりホーム・ふれあいの家」の事例から紹介する。

「むくどりホーム・ふれあいの会」に来た人たちが、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由の子ども親から、障がいの話聞く機会を持つ。親同士が友達として継続した交流の輪が広がる。障がい児の親が公園で出会った人と会話を交わす姿は、人々の生活に和らぎをもたらす。もちろん障がい児家族のストレス解消や支えになる。むくどりホームは、ハンディの有るなしにかかわらず集う場だが、心のバリアは、知らないということから生まれる。時間はかかるが、はじめに偏見や誤解を取り除く作業が必要だ。

②特別支援学習の先進的な場として

- ・乳幼児の保健活動を進める場として専門的にかかわりの場とする
- ・総合学習の一環で小中学生との交流
- ・大学生の実習や研修の場に
- ・健常児、地域の通園・通所施設の人々との交流、校外学習の場に、
- ・託児ボランティア、コンサルタント、地域民生委員、主任児童委員などの学習の場 などの交流の場として

留意点

以上は、障がいの有るなしにかかわらず、家族支援としても貴重な活動となる。

①参加者の総意から生まれる力を大切に主体的な参加は創造性を育てまた自由であるが課題も多い。利用者からの聴き取りやアンケートを使って常に問題を明

きらかにしながら「共通理解と相互の尊重」をベースに、提案からの問題解決を図っていく配慮が必要である。

②規則を最低限に、こんな提案を！

i こうしましょう

- ・どんなに小さくても弱くても決して軽んじない。
- ・今日あなたと出会えて嬉しい、また会いましょう。
- ・子どもの良いところは褒め悪いところはお互いに注意する
- ・成長や変化を信じて子ども達を見守る
- ・本人のいないところで批判や悪口はいわない

ii 参加することがプログラムに

- ・障害のある人、ない人が自然にふれ合い共に理解する時間をもつ
- ・障害のある人、ない人ともを温かく迎え向かい合う

③地域社会に根ざした運営とする

公的施設であれ民間 NPO や自主団体であれ地域の資源を生かした活動でありたい。地域とは生活の拠点をもつ、英語でいうコミュニティーの創設であり、さまざまな機関の連携が生まれるような協力と資金の支援が求められる

(2) 新しい自己実現プログラム

趣旨

ひろばは特別なニーズをもつ人々にとっても新しい自己実現の場となりうる。それを生み出すひろばでの経験、スタッフや人とのふれあいがそれを生みだせるよう、配慮していくことが望まれる。事例を紹介する。

①出産の直後の若い母親が保健師の紹介でひろばへ。その後現われず気懸かりだったが、軽い育児ノイローゼだったという。その後ひろばでたまたま聞いた男性保育士の「絵本読み」に感動し、今は自分も本読みの修行に挑戦中である。

②ひろばが新しい居場所になった事例

i 学校では要注意の小学生男児が、ひろば見学に来た人に生き生きと説明ができて自信がついた。

ii オール1という中学生は年下の子ども達をリードして遊ぶのが上手、この分野にも「通知表が欲しいね」という周りの人の評価が本人の生きる喜びに。

iii 授業に欠席していた生徒を、ひろばに探しに来た学校の先生がいる。学校との信頼関係が生徒を通して生まれた。(むくどりホーム5周年記念誌から)

(3) 心のバリアフリーを実現するために検証しておきたいこと

3.11)では、障害児親子を例に、特別なニーズを持つ人もそうでない人にも、バリアのない場をつくる、ひろばがそうした場になって行くための提案を行っている。誰にとっても居心地のよいひろばであるために、検証しておきたいことを以下にあげておく。

検証1)

①「ひろば」は子育て家庭の育児を豊かにする場として、またできるだけ家から出にくい子どもや親が参加することが課題であることを再確認していただろうか。

②障がい児支援プログラムは、障がい児のみのためではなく、ひろばのだれにでも共通のプログラムになれる可能性をもっていることを確認できただろうか。

③障がいを持つ子も健常児も分け隔てない受け入れるころのバリアフリーを本当に目指しているだろうか。

はじめは上手く関われなくても、共に過ごす時間の中で作られる関係性を肯定的に待つことができただろうか。

検証2)

①先に引用した札幌市バリア・フリー公園に携わった設計者の一人は行政マンでありながら福祉行政には無頓着で、*ワー

クショップを通して「初めてその意味を理解した」という。滑り台もただ幅が広ければよいのではなく、親子が一緒に滑ったり横揺れを適度にする、ほどよい幅があることを母親から聞いて、生の声ほど良いアドバイスはないと痛感したという。詳細な配慮については専門家だけで見込み判断せず、利用者生の声、模擬実験のなかから常に改良を加えつつ進めていく必要性を感じたとも表明している。健康な子どもの遊具は障がい児には使えないが、障がい児用の遊具は健常児にも楽しめる遊具として活用するのだということも、スタッフ一同大きな勉強になったと述べている。

②すべてのプログラムとは規格や思考だけに依らず具体的な試行錯誤の中から生れることを心にとめておきたい。また常に多くの課題を視野に入れながら、ひろばの企画を推進する勇気が求められる。

「児童は人として尊ばれる」「児童は社会の一員として尊ばれる」「児童は良い環境中で育てられる」(児童憲章 前文より)

③バリアフリーの一步から始まる子育て家庭支援は、ノン・プログラムの中に秘められた具体性のある関わりによって達成されるもの、すべてのニーズを満たす人が尊重される社会づくりへの提言でもあると考える

*『むくどりホームふれあいの家』

*引用文献：柴川明子「こころのバリアフリーを目指した活動の意義」北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室
社会教育研究 21号

*参考文献 厚生労働白書平成 10 年度

(4) シングルペアレントのつどい

趣旨と目的

今回のひろばに関する調査では、シングル家庭への支援を行なっている「ひろば」は 29 件とはなはだ少ない。父親の

育児参加への支援プログラムをもっているところが多いのは、昨今の時代を反映していると思われる。平成 10 年度母子家庭総数は約*954,900 である。母親の就業率は母子家庭全国調査・平成 10 年度実施によると仕事の内容は問わず総数 84.9% であり、* (不就業 13.6%) 保育所利用者のほうが多く、ひろば利用は困難な家族であると推測される。

しかし母子家庭になった時の末子の平均年齢が 5.4 歳であり、0~2 歳の場合が 30% を占めていることから、ひとり親への支援、とくに心のケアが必要と考える。

こうした親子がひろば利用をしたり、そのきっかけづくりのためのプログラムの提案を行う。

実施方法

① 対象

乳幼児とその親(母子・父子を含む)

② 広報・呼びかけ

児童館やひろばに出向けない親子への呼びかけには相当の工夫が必要である。母子会やひとり親の団体への働きかけ、行政の担当窓口、主任児童委員等へも呼びかけて理解を得ておくことが望ましい。

③ 開催

通常でも週末の開所が望ましいが、月に 1~2 回でも休日の開催が望ましい。

③ 受け入れ

受け入れは、静かにゆとりを持ったかわりを心がけ、とくに子どもの不安を取り除き、親子の一体感のあるかわりを大切にするために、無理な親子分離を行なわない。

④ 活動の進め方

- i はじめはくつろいだ雰囲気、自由にゆっくりと過ごせることを目的とする。スタッフやボランティアがそれとなく声をかけ、子どもの遊び相手をする。
- ii 家や子どもの年齢が近い、仕事や趣味

が似ているなど同じような親子をつなぐ、紹介するなどを試みる。

iii 求められれば相談をうけて、必要に応じて情報を提供したり他の機関やリソースにつなぐ。しかし押しつけにならないよう、判断は任せることが必要である。

iv 子どもへのアプローチでは、たとえば時には男性のスタッフがかかわって、身体を使った活発な遊びも喜ぶようであれば行う。

v 親同士が親しくなって次回を約束できるようにになれば、希望のテーマを決めて話し合いを持つこともよいだろう。進め方は3-4) 親のエンパワーメントや9) 情報提供に示した親同士のグループの進め方が参考になるだろう。

vi 親同士、子ども同士が仲良くなって、ひろばに集うことが楽しくなるように楽しい親子遊びやわらべ歌などを提供するのによいが、あくまで参加は自由とする。

フォローアップとして

①参加人数が一定しなくても自由参加として、つどいを定例開催としておくことで、来られるときに来ても参加しやすくなる企画や配慮をして誘っていく。

②通常からひろばに来やすいよう、時々はがきを出したり電話を入れてつながっておく。

留意点

①ひとり親家庭は、就労や日々の生活だけで親子で出かける時間のゆとりや、場所の確保も困難である。親子ともにゆっくりと過ごす時間も限られやすい。ひろば利用も休日に限定されるので、休日開所に努力する。

②親子で外出して、家以外でほっとできる場となるような配慮が必要である。ひろばへの入りにくさは、はじめは誰にも共通しているが、初めての人にはとくに

迎え入れを丁寧に行い、ひろばの内容についてオリエンテーションを行う。その後も時々声をかけて、ニーズに応じる姿勢を示すことが望ましい。

③シングルペアレントになった動機はさまざまである。ひろばが、シングルであるか否かにかかわらず、遠慮なく安心していただける場としたい。

ときには思いを聴いて気持ちを共有できるスタッフが求められることもある。そうしたニーズに応えうるスタッフの力量も欲しいところである。

④シングルペアレントとして、同じ思いの親同士が語り合える場や機会が必要になることもあるだろう。③-8) ひろばの相談、に示した専門家による「レインボウ・プログラム」が有効な場合もあることも付記しておく。

Ⅲ 3. 12) 支援者の研修

趣旨

現在たくさんひろば等ができてきているが、国のつどいの広場事業においても、また NPO 等の現場においても、支援者の資格を規定したものはない。現場にいる多くのスタッフやボランティアが子育て経験を持つ先輩親であり、加えて子育てになんらかの力を提供したいとする善意の人たちによって運営されていることが多いのが現状である。

実践にあたっているスタッフやボランティアには善意の素人から、保育に経験も知識もある保育士や助産師、事務の専門家や地域活動を長くしていた人など、さまざまな人がいる。こうした人たちは職能集団として共通の言語を持っている場合とはまったく違い、「保育」「子ども」「見守り」といった言葉一つひとつにも理解が異なる。多くの人はいくつかの言葉について、考えたこともなく関心も薄かったりする。

ひろばは乳幼児の親子を対象とする特殊性から、保育や子どもについての経験・知識や専門性を持つ人がリーダーシップをとる可能性が多くなる。そうした中では専門性を持った人に「保育とは、支援とはこういうものだ」「こどもとは…」と他のスタッフやボランティアが指導されることが起こりやすくなる。その結果、その言葉を絶対的なものとして自らは考えなくなったり、指導に縛られて自らが生きいきと動けなくなるなども起こりやすい。スタッフ間の共通理解が必要である。

ここではスタッフ同士で日常的にも行える4つの研修プログラムを提案する。

(1) みんなで話そう会

目的と実施

日ごろスタッフとして疑問に思うこと、迷うこと、分からないことなどから、ひとつのテーマについてみんなで話すということを研修の機会とする。正解がない

という前提で、一人ひとりの話に耳を傾け、以下を体験することを目的とする。

- ・お互いを深く知るといふ貴重な親睦の機会
- ・多様なものの考え方にふれる
- ・共感しあうことができる
- ・自らが語るにより、主体的に創造的に活動に取り組んでいくようになる

留意点

- ①育児という正解がないものに取り組んでいる親子に接するスタッフにとって、「こうすべき」という固定した情報を研修で学ぶよりも、このように話し合うかたちで、共通理解を作っていくことが大切である。中には「ただ話しただけ?」「何を研修で得たのかわからない」という感想を持つものも出てくる可能性もあるだろう。疑問な点や問題点は繰り返し話し合っ、スタッフ間で了解しあったうえで対応していくことが望ましい。
- ②この話し合いにおいては、スタッフ間、ボランティアとの間に上下関係を持ち込まないこと、親子にかかわるもの同士として対等な立場にあること、プライバシーにかかわる守秘義務、発言内容について互いに尊重する、外に漏らさない等についてのルールが守れることが大切なことになる。

(2)話を聴く・聴いてもらう

目的

ひろば等において人を支援するには、なにかをやってあげたり、指導してしまうのではなく、カウンセリング・マインドをもつことやファシリテーター的な役割を取って、親子に寄り添うことが求められる。ひろばでの親は、お互いの話の中から答えを見つけることが多いし、ただ話したい、聴いてもらいたいという気持ちが満たされれば、また聴いてもらうだけで気づいたり、問題が解決してしまうことが多いのである。

したがって、スタッフやボランティアは相手を指導するのではなく、まずは相

手の話を聴く力をつける必要がある。話をしっかり聴いて、本人が答えを見つける手伝いをするのがスタッフの役割であることを再認識したい。

このプログラムでは、まず話を聞いてもらえない事態を体験し、次に聞いてもらえる体験をして、聴くということがどうということかを考える機会とする。

実施方法

- ①話を聴かない、聴いてもらえない体験
互いに話を聴きあうが、相手の話をなるべく聞かないように努める。指導的・支配的であったり、自分の興味で質問を浴びせたりして悪い聞き方を試みる。
 - i 二人で組み、片方が話し役、他方が聴き役となり、聴いてもらいたいことを2~3分話す。感じたことをメモする。
 - ii 次に役割を交代し、同じく話し、聴く。気づいたことをメモする。
 - iii 互いに感じ、気づいたことを話し合う。この際、自分がどのように感じたかに焦点をあてて、正直に話し合う。
 - iv 人数が多い場合は、二人で話し合ったことを全体に出してさらに話し合うことで、みんなの共通理解とする。

②相手の話をしっかり聴く

- i 二人で組み、片方が話し役、他方が聴き役となり、聴いてもらいたいことを2~3分話す。感じたことをメモする。
- ii 次に役割を交代し、同じく話し、聴く。気づいたことをメモする。
- iii 互いに感じ、気づいたことを話し合う。このようにしてもらってよかった点、もっとうこうして欲しかった点などについて、正直に話し合う。
- iv 人数が多い場合は、二人で話し合ったことを全体に出してさらに話し合うことで、みんなの共通理解とする。

(3)「親」と支援者のロールプレイ

目的

支援者としてひろばにかかわっていると、相談をもちかけられることが多いが

親の本音は見えにくい。回を重ねて信頼関係ができてこない、本当の気持ちを打ち明けてもらえないことが多い。親がどんな気持ちになるのか、ロールプレイで演じてみると分かることが多い。役を交代することで両方の立場や気持ちを体験して、支援の場で親への対応に備えることを目的とする。

実施方法

- ①人数が奇数の場合は、一人がオブザーバー役を執り、気にならない位置にいて二人の話をひたすら聞く。気づいたことをメモして、二人の話には反応を表明しないことが大切である。
- ②二人で組み、片方が親の役になって、その親が抱える問題について、10分ほど相手に相談する。答えを出す必要はないこととする。終わったら感じたこと、気づいたことをメモする。
- ③役を交代して同じことを行う。終わったら気づいたことをメモする。
- ④オブザーバーも交えて、気づいたことを話し合う。人数が多い場合はその気づきを全体で話し合っ、共通理解を深めるようにする。

留意点

- ①話されたことについて、解決策を考えるのではなく、話してみても得た感触や感じたことに焦点をあてて話し合う。
- ②親はこのように言われたらこのように感じるのだ、ということを経験する機会である。親が何を求めて、聞いてくれるスタッフに話しているのか、それに対してスタッフはどう対応したらよいのかについて、考えあう機会とする。

(4)ロールプレイ「親グループの話し合い」

目的

ひろばでは親同士が出会い、それとないおしゃべりの中からお互いに学ぶことも多い。公園グループなどでは、一部の親のリードが強く、他の人が引きずられ

て言いたいことが言えない、どこに洩れるか分からないので、うっかりしたことが言えないなど、親しい間柄でも本音や深い話が話せないのが現状である。

ひろばにおいては、スタッフがいることで聴いてもらえるという安心感があり、親同士がグループで正直に話し合える設定もしやすい。研修としては、Ⅲ 3. 4)

(2) に示したグループ懇談を想定して、スタッフがグループのファシリテーターを務めるために、スタッフ同士が親役を演じ、交代でファシリテーター役を練習する機会とする。

実施方法

- ① 5～7人でグループになり、それぞれが、自分で想定する親役を演じるが、交代してファシリテーター役をとる機会も入れていく。
- ② まずファシリテーター役が参加する「親」たちに、取り上げて欲しいテーマをあげてもらおう。テーマが集まったところで、参加者に話しかけてひとつのテーマに絞るための希望を聞く。一人ひとりの要求に耳を傾け、時間をかけて全員が納得がいくテーマに絞るように配慮する。テーマを絞ることで、はじめからその話題に入りやすく、目的をもった話し合いになりやすい。
- ③ 話し合いを始める前に、気持ちをほぐすために少しからだを動かしたり、ゲームや自分の思いを入れた自己紹介などのアイスブレイカーを行う。ファシリテーターは随時交代してなるべく多くの人が経験するようにする。
- ④ 話し合いに入る前に、ファシリテーター役が、この場を安全な場にするのを約束する。そのほか各自が安全であるために、希望すること、避けて欲しいことを出しあって、皆で確認する。
- ⑤ 決まったテーマについての話し合いを行う。話したい人から自由に話してもらおう。順番に話しをさせるとか、話しに参加することを強制しないようにする。話しを独り占めしたり、意図的に

偏った方向にもっていく動きなどについては軌道修正を行う。基本的にはグループのみんなが安心して話し合いに参加できるよう、一人ひとりの様子に気を配る。話しに入りにくい人については、話しやすい状況やタイミングを見計らって話す機会を提供するよう配慮する。

- ⑥ 一区切りがついたところで、これまでのセッションのふりかえりをする。
- ⑦ 以下について、皆で考察を行う。
 - i ファシリテーショングループに参加した「親」として感じたこと
 - ii このファシリテーションを親グループに用いるにあたって必要なこと、配慮することはなにか
 - iii ファシリテーター役をやって、気づいたこと、反省点、グループを行う上でのメリット・デメリットなど
 - iv ファシリテーション・グループに参加して、スタッフとして考えたことなど
- ⑧ スタッフの次の集まりの際、ひろばで親との会話や、グループとの接触で気づいたこと、応用できたことについて話し合っただけスキルアップにつなげる。

留意点

- ① 個人のプライバシーにふれることが多いので、出てきた話について、守秘義務を守る。
- ② 職場としての上下関係があったとしても、研修の場には互いに対等な立場で参加し、発言しあうことが大切である。はじめにこれを確認しておくことで、強いものにひきずられたり、自分に不都合が生じるような発言ができなくなるなどの事態を避けることができる。これらが守られて、はじめて本音で話しができるのである。
- ③ ひろば等のリーダーや責任者は、こうした研修をスタッフに保障するとともに、研修をファシリテートできる外部からの講師を導入して、研修をより充実させる配慮をしていくことが望ましい。

IV まとめと考察

1. 子ども家庭支援ニーズとプログラム

本研究では、カナダの子ども家庭支援の実態の調査、わが国の子育て支援にかかわる支援者および乳幼児のいる家庭の親を対象にしたアンケート調査、先進的な取り組みをしているひろばへのヒアリング調査を通して、子育て家庭に本当に必要な支援とは何かを探った。そこから得られたデータを基礎資料として、子ども家庭支援へのプログラム提案を行っている。

ここで、これまでの考察から、わが国の乳幼児のいる子育て家庭には、どのようなニーズと支援の必要性と課題があるのかを7つの視点からまとめおきたい。

1) 常設のひろば

親向けのアンケート結果から、親子が集える場所へのニーズが非常に高いことがあらためて明らかにされた。一時預かりの場よりも、圧倒的にそのニーズが高いという結果であった。そのため、まずは、常設の気軽に集うことのできるひろばが、量的に増えていくことが、今後、もっとも求められていると言える。

ひろば利用者は、そうでない親と比較して、子育て仲間に相談するケースが多いという結果も得られたが、そこからもわかるように、親子の孤立化、密室化を防止しているという効果があることも明らかとなった。

ただし、親子が集えるひろばさえあれば、それで子育て仲間とのつながりができ、支えあう関係が生まれるという単純なものでもないだろう。そこに、スタッフの役割とひろばの質がある。様々な子育て支援プログラムの基盤に質の高いひろばが存在することが求められる。

2) 一時預かり

親向けのアンケートから、子どもの預

け先の多くは、パートナーや祖父母であるという結果が得られた。そして、ファミリーサポートセンターや一時保育等の選択が極めて少ないという実態も明らかとなった。調査対象が第1子で小さい年齢の子どもが多いこともあるが、なかなか安心して預けられないといった親世代の傾向と、本当によくわかっていて安心できる預け先がないというのが現実だと推測される。

だからこそ、日常的に安心できる場で、よく顔の見知った人のいるひろばで預かることの意味は大きいということが明らかとなった。そのため、ひろばにおける一時預かり、あるいは相互預かりプログラムの提案を行った。

しかし、支援者向けのアンケートからもわかるように、ひろばで一時預かりを実施しているのは、2割程度である。多くが、一時預かりの必要性があると考えているものの、あまり広くない場の中で日常的に集う親子と預かりの子どもが共存する体制の難しさがあるとの声が聞かれた。安全・危機管理体制も含めて課題が少なくないようである。

3) 親のエンパワーメント

支援者によるアンケート結果によると、特に行っている活動形態として、講演会が最も多く、それとほぼ同数で日常的に話し合う機会提供がそれに続いていた。特に、この日常的に話し合う場をどのようにコーディネートしていくかがとても大切であることがわかった。

しかし、親たち小グループでの単発、連続の座談会的な学びの場はあまり多くなかった。このような場をコーディネートするスタッフの役割の難しさや、ノウハウがないことが、座談会的な学びの場を提供することができないという実態を生み出しているのではないかと考えられた。日常的な話し合いの場の提供に加え、少しテーマ性のある座談会的な学びのプログラムの提案を行った。